カナダ人のナショナル・アイデンティティーとアイス・ホッケー

嘉　納　も　も

英語圏カナダ人のナショナル・アイデンティティーはアメリカとの対比に基づいて形成されてきた部分が少なくない。同じ様にイギリスの植民地としてスタートしながらも、両国は異なる歴史的経緯を辿って独自の社会を作り上げてきたわけだが、世界一の強国となったアメリカに隣接し、政治・経済はもとより文化の面でもその影響を日々受けずにいられないカナダでは、人々は常に自分達の独自性を確認し、模索することになる。この論文ではカナダで生まれ、現在も最も人気が高く参加人口の多いスポーツ、アイス・ホッケーがカナダ人のナショナル・アイデンティティーの拠り所となった過程を振り返る。そして議論をもう一歩深めて、文化的シンボルとしてのスポーツ、アイデンティティーの構築などのテーマにも言及する。

キーワード　スポーツ、ナショナル・アイデンティティー、アイス・ホッケー、カナダ

Ⅰ．カナダの特色

豊かな国土。美しい湖や森林。東はナイアガラの滝、トロントにケベック州、そして西はバンクーバー、バンフやウィスラーなどのスキー場。観光客向けの案内書ではないが、カナダと聞いて他国の人々が連想するのはそんなところに違いない。

もう少し踏みこんで、カナダ社会の特色は？と尋ねてみる。少しの間でもカナダに住んだ人間なら、多民族共存の歴史が長いため(特にトロントやバンクーバーなどの大都市は)外国人にとって居心地の良い環境が整備されている事に気づく。移民の子女を対象にした教育システムも整っているし、税金が高い代わりに健康保険は無料で住民全員に施される。そしてアメリカとは違って銃の所持が規制されており、治安が比較的良いのも事実だ。

ではカナダの文化について、具体的にその特徴やシンボルは何かと問われてすぐに答えられる人はいるだろうか。フランスの国や文化と繋がりを保ちつづけている(主に)ケベック州のフランス系カナダは別として、いわゆる英語圏のカナダの文化は、アメリカのそれと一体どう違うのだろうか。少々の訛りの違いはあるとしても、同じ英語を喋り、多様な民族が入り混じっているため、外見的にも区別することはあまり意味がない。二国間の物資や人材の流通は1989年の自由貿易協定の制定以来、一層盛んになったし、インターネットの到来で情報へのアクセスが世界中、ボーダーレスに

なる以前から、テレビやラジオの放送ネットワークは共同で使用されてきた。しかし人口がカナダの十倍近いアメリカは言わずと知れた世界一の大国である。そのすぐ北に位置し、日々、アメリカ経済との競争を強いられ、政治の舞台でも「オタワはワシントンのいいなり」と思われるのは仕方がないとして、文化の面でもアメリカからの侵略に脅かされるのはカナダ人としての独自性やプライドの問題に関わってくる。ところがどうも自分達の国や文化の特色について説明する時、「とにかくアメリカとはここが違う」という方向に話が向いてしまい、結局アメリカを用いての議論になりがちなのは辛いところである。

例えば学校の社会科の授業や大学の社会学の講義でも、同じ様に移民と開拓の歴史を辿りながらも、カナダはアメリカとは違った哲学に基づいて、違った対応をし、今日の社会を築いたのだ、という見解が頻繁に主張されている。具体的にどこが違うかと言えば、カナダの社会学者イサユーは、アメリカの西部開拓が無法地帯で自分達のサバイバル能力だけを頼りにした開拓者によって進められたのに対して、カナダのフロンティア開拓は常に政府の管理と指導のもとに行なわれたという点を指摘している。またイギリスの支配下から逃れるために独立戦争を経験したアメリカに対して、カナダは憲政君主制を選び、制度の面でも文化の面でもイギリスとの絆を払いのけようとしなかったことに言及している(Isajiw, 1999: 44)。これをカナダ側は自分達が「親離れ」しなかったのではなく、秩序正しく平和な社会を目指したと解釈することで、個人主義やビジネス精神を重んじるアメリカに対抗するわけである[1)]。

そしてさらにエスニシティ学の分野でも、カナダ社会はアメリカの「メルティング・ポット」とは異なる「エスニック・モザイク」の思想に基づいて移民やエスニック・グループの統合を目指しているとされている。つまり、人類の「るつぼ」を信条とし、新参者を全て偉大なアメリカ国民の一員に生まれ変わらせようとするアメリカ人に対して、カナダ人は自分達がいかに移住者に寛大で、彼らが独自の伝統や慣習を保持することを認めているかを強調する。

もちろん、これほど単純にカナダとアメリカを対比させることは出来ないはずであり、カナダ側はそれにこだわることによって、よけいコンプレックスを露にしてしまう。そしてそれを一番良く知っているのもカナダ人なのである。

さて、今年の春頃にカナダで一世を風靡したコマーシャルがある。この国の三大ビール会社の一つ、Molson 社の「カナディアン」というビールの宣伝なのだが、近頃では "The Rant"(「わめき」とでも訳せるだろうか)という呼び名で親しまれるほどなっている[2)]。このコマーシャルにはカナダ人の自己象が良く表れている点が大変興味深いので、ここで(筆者の意訳と共に)紹介することにする。

若い男性がどこやらのステージに上がり、ためらいがちに中央に置かれたマイクの前に立って、

---

1)同じ様な歴史的分析を展開したものにアメリカの社会学者リプセットの有名な著書 *The First New Nation* (1963)、そして最近では *Continental Divide* (1990) がある。もちろん、リプセットの焦点はアメリカの特殊性であり、カナダに関する分析はそれを浮き彫りにする役割を果たしている。

2)このコマーシャルは現在 http://www.adcritic.com/content/molson-canadian-i-am.html で見ることができる。

“Hey” と観客席に向かって挨拶する。会場は暗く、その若者だけにスポットライトが一つ当たっている。彼のいでたちは、T シャツの上にはおったチェック模様のシャツ、くたびれたジーンズにスニーカー、と一見何の変哲も無い。清潔でハンサムではあるが、どことなく垢抜けないという風貌をしている。

やがて彼は喋り出し、その言葉に合わせて幾つかのスライドが背後に映し出される。

I'm not a lumberjack or a fur trader	僕はきこりでも毛皮商人でもない。
I don't live in an igloo or eat blubber or own a dog-sled	イグルーに住んでもいないし、鯨の脂身も食べないし、犬ぞりも持ってない。
And I don't know Jimmy, Stanley or Suzy from Canada	それで、同じカナダ人だというだけでジミー、スタンリーやスージーを知ってるかなんて聞かれても無茶だよ。
Although I am certain they're really, really nice	彼らはそれはそれは良い人達に違いないだろうけど。
I have a Prime Minister, not a president	僕には大統領じゃなくて、首相がいる。
I speak English and French, not American	僕は英語とフランス語を話すんだ。アメリカ語じゃない。
And I pronounce it “ABOUT” not “ABOOT”	そして「ABOUT」は「アバウト」とちゃんと発音する。「アブート」とは言わないよ。
I can proudly sew my flag on my backpack	僕はリュックサックに堂々と自分の国旗を縫いつけることが出来る。
I believe in peacekeeping not policing Diversity not assimilation”	僕は治安維持ではなく平和維持を、 同化ではなく多様性を信条としてる。

この辺りから青年はにわかに声が大きくなり、ジェスチャーも芝居がかって来る。

And that the beaver is a truly proud and noble animal	そしてビーバーは本当に誇り高く、崇高な動物だってことも信じてるさ。
And a “TOQUE” is a hat	そして「トゥーク」というのは帽子のことで、
A “CHESTERFIELD” is a couch	「チェスターフィールド」は長椅子なんだ。
And it is pronounced “ZED”, not “ZEE”, “ZED”	そして「Z」は「ズィー」じゃなくて「ゼッド」って発音するんだよ。分かった？
Canada is the second largest land-mass	カナダは世界で二番目に大きな陸地で、
The first nation of hockey	ホッケーに関しては最高の国民で、
And the best part of North America	北米の一番良い部分なんだ。
My name is JOE and	僕の名前はジョー、そして
I AM CANADIAN!	僕はカナダ人だ！

ジョー君の最後の雄叫びと共にコマーシャルは荘厳なクライマックスを迎える。が、そのすぐ後、彼は我に戻ったかの様に小さな声で「ありがとうございました」と行儀良く言う。この落ちには、カナダ人が自虐的とも言えるほどに自分たちに対するステレオタイプ、特にアメリカ人から見たカナダ人のイ

メージを意識していることが表れている。

Ⅱ．文化的シンボルとしてのアイス・ホッケー

このコマーシャルが7月1日の「カナダ・デー」前、という一見、最もふさわしそうな時期ではなく、わざわざ春に初めて放送されたのは偶然ではない。4月といえば、カナダ全土がナショナル・ホッケー・リーグ（National Hockey League 以下 NHL）のプレイオフに熱中し始めるシーズンだからである。オリンピックの様なスポーツの国際大会が愛国心を高めるというのは周知の事実であるが、この NHL のプレイオフはカナダ対他国、という形式ではないにもかかわらず、カナダ人のプライドを大きく揺さぶるものなのである。何しろ、普段は遠慮深いカナダ人たちが過去一世紀余りを通じて、躊躇なく「カナダらしさ」のシンボルとして挙げられるのがアイス・ホッケー[3]だったからである。“The Rant” はそういった人々の心に訴え、その名も「カナディアン」というビールの売上を伸ばそうとしているわけなのだ。

「ナショナル・アイデンティティー」の定義

さて、ここで「ナショナル・アイデンティティー」という概念を導入すると、議論はより進め易くなる。本論文では「ナショナル・アイデンティティー」を人々のある国民に対する「帰属意識」として理解する[4]。前述の社会学者、イサユーの言葉を借りれば、アイデンティティーは「心理的な位置付けの方法」（Isajiw, 1999:176）であり、これを本論文の文脈に当てはめると、「カナダ人としてのナショナル・アイデンティティー」は人々が「自分はカナダ国民に属しているのか、していないのか」と自問自答する心理的な位置付けということになる。

では人々はどの様にしてその位置付けを行うのだろうか。国民としての法的な資格、つまりカナダの場合なら「市民権（Canadian citizenship）」は、カナダで生まれた者、カナダ市民権を有する父親あるいは母親を持つ者に自動的に与えられる。その他の者でも必要な事務的手順を踏めば、移民権を取り、そしてカナダ在住3年後には市民権を獲得する事は可能である。しかし市民権や国籍はナショナル・アイデンティティーの前提であっても、ただ一つの充分な根拠というわけではない。人々はその国の様々な文化的シンボルに共鳴したり、同じ国民の成員と連帯感を味わったり、その社会の制度や法律に尊敬の念を抱いたりして、自分達がその国民の一員であると心底から意識するのである。また、人類学者のバースがエスニック・グループに関して指摘した様に、人々は他の集団との相互作用によって自分達の集団の「境界」を明確にするという事も確かである（青柳、1996:33

3）以下、「ホッケー」と略する。実際、カナダでは「ホッケー」と聞いて「アイス・ホッケー」と理解しない場合はほとんどない。

4）この「ナショナル・アイデンティティー」という概念は、例えば歴史家のブローデルがその三部作（1986）につけたタイトル、*L'identite de la France*（下線筆者）の様な「ある国のアイデンティティー」といった概念と区別しなければならない。ブローデルは第1部の序章の中で、自分の意図がフランスの「アイデンティティーあるいは本質（*“essence”*）」を地理学的・歴史学的な分析によって理解する事だと記している。つまり彼の焦点は「フランス人とその国民的帰属意識」なのではなく、「フランスという国の独自性」なのだと言えよう。

-34)。となると、第１章でも論じたカナダ人とアメリカ人の頻繁な接触および比較が、カナダ人のナショナル・アイデンティティーを確認するのに役立っているのだと解釈できよう[5)]。

さて、文化的シンボルというのは重要なナショナル・アイデンティティーの拠り所の一つである。第１章で紹介したコマーシャルのジョー君はその様なシンボルを列挙したが、その中の一つである「多様性」というキーワードに着目したい。確かにカナダ(特にその都市部)では多数の移民やエスニック・グループが共存しており、それがカナダ社会の一つの特色と言える。しかも、それらの集団が独自の文化遺産を継承して行くことを奨励する風潮があり、「多文化主義(muticulturalism)」という政策さえ存在する。それゆえに、歴史的にカナダの多数派・支配層であったアングロ系カナダ人の文化をカナダ全体の文化として見なすのはもはや「政治的に正しくない(“politically incorrect”)」のである。例えば、クリスマスがキリスト教の祭典であり、他宗教の生徒には異質であるとして、カナダの公立学校では公のニュースレターの挨拶などに “Merry Christmas” ではなく “Happy Holidays” と記さなければならない。また、これ以上カナダらしいシンボルはないと思われるような Royal Canadian Mounted Police(カナダ王立騎馬警察)は真っ赤なユニフォームとテンガロン・ハットがセットになっているが、その帽子を拒否し、宗教で定められたターバンを被る権利を主張したシーク教徒の警察官が最高裁判所で勝利している。皮肉な事に「カナダらしさ」の一つであるはずの「多様性」は、カナダ人の大多数が共通の文化的シンボルを持つことが出来なくなるという結果を招き得るのである。

そんな中で、スポーツは様々な差異を超越して、人々が純粋に共に楽しむことの出来る貴重な活動である。以下では何故、数あるスポーツの中でもホッケーが実に多くのカナダ人の間で強力な文化的シンボルとなったかを歴史的な観点から述べる。

カナダ人の日常生活におけるホッケーの歴史

カナダ人とホッケーほど、一国民の日常生活と、たった一つのスポーツが密接な関係にあるのは世界にもあまり例を見ないだろう。

2000年度のカナダ・ホッケー協会(Canadian Hockey Association 以下 CHA)の調べ[6)]によるとカナダ全体の人口が約3000万人なのに対して、450万人ほどのカナダ人が選手、コーチ、審判員、協会運営職員、あるいはボランティアとして直接ホッケーに携わっているそうだ。そしてその中でも各都市のリーグに在籍している子供達の数は(ホッケーの盛んな)スェーデン、フィンランド、チェコ共和国、スロヴァキア、ロシアのそれを合わせたものの3.5倍にも値するという。アリーナ(ホ

5)ところがその逆は必ずしも真実であるとは言えない：アメリカ人がカナダ人との対比において自分達のナショナル・アイデンティティーを意識することは少ないだろう。例えば、５月30日付けの *Business Week On Line* に “Deconstructing the Molson's Rant Ad” という評論が載った。そこで筆者 (Thane Peterson) は “The Rant” におけるカナダ人の被害妄想を指摘している：“The Rant is about the misconceptions Canadians think Americans would have about Canada if Americans ever thought about Canada, which they don't.”
http://www.businessweek.com/common frames/bws.htm?
http://www.businessweek.com/bwdaily/dnflash/may2000/nf00530f.htm)。

6)CHA ホームページ参照：http://www.canadianhockey.ca/e/index.html

ッケー競技の行なわれるスケート場)に至っては全国各地、3000箇所以上に存在し、これはカナダ人1万人に対して一つのアリーナがあるという意味では驚異的な数字に違いない[7)]。

しかし、そういった組織化された形態ばかりでカナダ人はホッケーに関わっているのではない。トロントのような大都市でも住宅地に行けば冬には裏庭を水浸しにして自家用のリンクを作っているのを見かける。郊外やちょっと田舎なら、子供も大人も近所の池、川、湖の入り江などが凍ると用具やゴールのネットを持って集まる。夏は誰からともなく誘い合って、近所の車道でのホッケー試合が始まり、道を行く車のほうが遠慮して通るという始末だ。

サッカーは確かに南米の国々で最も人気が高く、参加人口も多いことから日常化しているだろう。だがサッカーが生まれたのはそれらの国ではない。ニュージーランドとラグビーという組み合わせも考えつくが、これもイギリスからその地に輸入されてきたスポーツである。その点、ホッケーは19世紀前半にカナダで生まれ、今もその生誕地が正確にはどこであるかを巡って、全国各地で争いが続いている[8)]。なぜカナダがホッケーの生まれた国であるかにこだわるかはまた後ほど触れるが、今、思い当たるものでカナダとホッケーの関係に値するのはノルウェーとノルディック競技、あとはアメリカとベースボール(しかしアメリカにはフットボールもバスケットもある)くらいだろう。

なぜ、これほどまでにホッケーはカナダ人の日常生活において大きな場所を占めるようになったのだろうか。

地方によって多少の差はあるとしても、カナダの冬は長い。11月に初めてちらつき、下手をすると4月の末まで降り続ける雪の中で人々は何とかして体を動かして、皆で楽しめる方法を探したに違いない。全国各地、氷点下の温度と水さえあればできるスポーツとしてホッケーが親しまれるようになったのも無理はないだろう。そして屋内リンクが全国の小さな町にまで建設されるようになった20世紀初旬、地元の高校や社会人のアマチュア・チームを土曜の夜に応援しに行くのが住民の楽しみとなって行った。その姿をかつて、村の人々が火を囲み、歌を歌ったり、踊ったりしたのに例えたホッケー解説者がいたが、その観察はそう外れてはいないだろう。あまり他に娯楽のない時代、寒い外気を逃れて暖かいアリーナに学校の友達や職場の同僚、近所の人たちと集まれば、自然とそこは社交の場にもなる。そして次の月曜日、一緒に観戦した試合はまた人々の間で話題となる。この様にしてホッケーによって結ばれる人間関係は実に多かったのである。

そしてホッケーは家族内の人間関係をも固める役割を担ってきた。特に息子と父親(この頃では母親も多いが)の関係が密にならざるを得ないのは、ホッケーの防具が重く持ち運びが困難で、またスケートの紐を結ぶのが小さな子供には無理なので、少なくとも最初の何年間かは車を運転し、試合や練習に同行できる大人の助けが必要だからである。プロのホッケー選手たちが語る幼少期の思い出のひとつに、必ずといって良いほど、早朝のまだ暗い内に起こされて練習に向かう時、父親が家の前の雪をかいて、車のエンジンを温めておいてくれた、などというエピソードが登場する。

---

7)ちなみにヨーロッパ中を合わせてもアリーナの数は千個しかないそうである (William Houston, “A game in crisis”, Part 9, Globe and Mail, April 1998)。

8)Cuthbert and Russel *The Rinks: Stories from Hockey's Home Towns* (1997: 4-7)

そして裏庭の雪をならし、水をまいてリンクを作ってくれたり、時にはコーチや助手として息子のチームに貢献したりするのも父親たちである。実際、息子のホッケー参加を一番喜び、自分の少年時代を思い出しているのは彼らなのかも知れない。

昔から、土曜日の夜には家族全員がラジオの前に集まって、カナダの国営放送局 CBC の "Hockey Night in Canada" の中継に耳を傾けるのが習わしだった。もちろんテレビが登場してからは、皆で居間や地下の娯楽室に座って試合を観ることになる。そして子供達は夜、ベッドでホッケーにまつわる絵本や小説[9]を読み、いつかは自分達も NHL にスカウトされることを夢見ながら眠りにつく。こうやってカナダ人の親子は代々、ホッケーに対する思い入れを伝えて合ってきたのだろう[10]。

もちろん、スカンジナビア諸国を始め、同じく冬の厳しい気候条件を備えた国は他にもある。そしてその国々でもホッケーはやがて盛んになった。しかし、カナダでは早くからホッケー協会が各地に発足し、1914年にはひとつの中央組織(現在の CHA)の傘下に収まっていった。それに平行してあらゆる年齢や実力別のレベルで全国大会が早くから開かれ[11]、大西洋から太平洋まで広がる巨大な国に散乱するわずかな人口を結ぶ絆が形成されて行ったわけである。

そして第一次世界大戦時(1917年)に発足したプロ・ホッケー・リーグの NHL は、五つのチームが全てカナダ(オンタリオ州とケベック州)のものであった。それ以前にも幾つかのプロ・リーグが存在したが長続きせず、それに比べ NHL はプロ・ホッケー最高のリーグに成長して現在に至っている。カナダの子供たちは幼い頃から、ホッケーを生涯のスポーツとして考え、またその中から有能な者達は、生計の足しにすることも志せたと言えよう。

またホッケーは特に一つのエスニック・グループが占めるスポーツではない。トロント市内の子供リーグからオリンピックのチーム・カナダに至るまで、選手達のユニフォームに刺繍された名前を見れば、アングロ系やフランス系はもちろん、イタリア、スペイン、ギリシャ、日本、中国、ウクライナ、ハンガリーなどのものが揃っている。また、昔から広く親しまれているヤングのホッケー物語シリーズ(脚注 9 参照)の主人公は、ポーランド人のビル・スパンスカという少年である。カナダに移民して来た人々の子孫が、カナダ文化からいち早く取り入れたものがホッケーだったのは自然の成り行きだろう。

現在、主に男子のものであったホッケーがカナダの女子の間でも盛んになって来ている。母親、妹、娘、そしてガール・フレンドとして観客でしかなかった女性たちが、今では自分たちのリーグを持ち、世界選手権やオリンピックにも参加するようになった。そしてこの女子の場合も、参加人口、および実力においてカナダは世界の先駆者となっている。これでホッケーはまさにカナダ人全体のスポーツとなったわけである。

---

9)代表的なものには Roch Carrier の名作 *Le chandail de hockey* (1979), Scott Young の三部作 *Scrubs on Skates* (1952), *Boy on Defense* (1953), *Boy at the Leafs Camp* (1963) などがある。

10)Cuthbert and Russel (1997: xiii-xiv)

11)一番古いものは成年アマチュア・ホッケーの全国大会 Allan Cup 全国協会発足前の1908年に初めて開催)、その次にはジュニア大会の Memorial Cup (1919) がある。(前述の CHA ホームページ、History, Page 3 参照)

Ⅲ．ナショナル・アイデンティティー形成におけるホッケーの役割

前章ではいかにしてホッケーがカナダ人達の日常生活に浸透し、単なるスポーツから文化的なシンボルとなったかを述べた。それを踏まえて、第３章では、カナダの過去50年の歴史の中で、ホッケーがカナダ人のナショナル・アイデンティティーの形成、強化、弱化に直接関わった事例を紹介する。

市民暴動のきっかけとなったホッケー選手

これまで主に英語圏カナダに関する考察を行ってきたが、ホッケーはフランス系カナダ人の間でも大変盛んである。ひと昔前のケベック州の住民にいたっては、ホッケーはほとんど宗教や教育と並ぶほどの重要な社会制度のように扱われていたと言っても大袈裟ではないだろう。だがいわゆる“Quiet Revolution”で1960年代に表面化し、1970年のケベック解放戦線（Front de Liberation du Quebec 以下 FLQ）によるテロ行為にまで及んだケベックの独立気運が、一人のホッケー選手によって1950年代の半ばにすでに火を点けられていたことを知る他国の学者は少ないかもしれない。

第二次世界大戦後、NHL に君臨するチームはそのニックネームも“Les Habitants-（ケベックの）地元民”というモントリオール・カナディアンズであった。そしてその中でも最も人気が高く、爆発的な攻撃力で有名だったのがモリース・リシャールという選手である。彼は自分を執拗にマークする相手チームの選手とも良く試合中に乱闘を起こしたが、ある日、その途中で止めに入ったラインズマンを激しく殴ってしまった。それが原因でリシャールは協会から出場停止処分を受け、そのシーズンの残りの試合を欠場することになる。リシャールの停止処分を下した協会のコミッショナーはキャンベルというアングロ系のカナダ人であった。そのキャンベルが、カナディアンズに続いてリーグで二位のデトロイトとの最終試合に姿を見せ、カナディアンズの本拠地アリーナ The Forum のいつもの自分の席に着いた。観客はやがてブーイングを始め、果てはトマトなどをコミッショナーに投げつける。事態はどんどん悪化し、アリーナの警備員がかけつけ、どこからか催涙弾が放たれた。当然試合は中断され、カナディアンズは試合放棄と見なされてデトロイトに負けてしまう。だが、外に流れ出た観客は試合のラジオ中継を聞いて駆けつけた他の者と合流し、１万人以上もの市民がその夜に暴動を起こす。1955年のこの出来事は“The Maurice Richard Riot”として歴史に名を残し、長年アングロ系のエリートに虐げられてきた（と感じていた）フランス系の市民が、リシャールを自分たちの殉教者として掲げ、立ち上がったのだと解釈されている[12)]。

さて、2000年６月にモリース・リシャールが死去すると、カナダ全国から膨大な数のメッセージが寄せられ、モントリオールで行なわれた葬儀には参列者が殺到した。その模様は国家的要人の葬儀のごと CBC によって全国に生中継されたが、その時にアングロ系（つまり支配層の）メディアに

12）前述の児童向けのユーモラスな作品 *Le chandail de hockey* はリシャールの幼いファンの物語である。その中で、少年は母親の手違いから憧れのカナディアンズのホッケー・ジャージではなく、憎いライバルのトロント・メープル・リーフスのジャージを通信販売で受け取ってしまう。彼の悔しさと悲しさが当時のアングロ系とフランス系カナダ人の対立を、良く表わしている。

登場し、流暢に英語を操る引退後のリシャールの映像が多く取り上げられた。その後も何日かに渡って特集番組が放送され、暴動にももちろん触れられていたが、焦点はあくまでも類なき名プレイヤーとしてのリシャールであった。

かくして、迫害されるフランス系カナダ人の代表はカナダ全体のヒーローとして葬られたのである。

カナダが一丸となった日々

「当時６才以上だったカナダ人なら、1972年９月28日にポール・ヘンダーソンが『あのゴール』を決めた時、自分がどこにいて何をしていたかを憶えているはずだ」

これはあるスポーツ記者が1992年の著書の序章で書いた言葉だが[13]、1972年のカナダ対ソビエトのホッケー対抗戦シリーズは2000年現在でもそういった仰々しい言葉で語られている。カナダ人にとって、この対抗戦はまさに伝説的とも言えるほどの意味を持つからである。

当時アマチュア・ホッケーにおいてオリンピックや世界選手権で王座を占めていたのはソビエト連邦であった。だがカナダは自分たちが最高のプロの選手たちさえ出すことが出来たら、間違いなく世界一であることを証明できると確信していた。そしてとうとう、1972年にソビエトのナショナル・チームとの８試合シリーズを実現させ、まずはカナダで４試合、そしてモスクワで４試合、戦うことになったのである。

カナダは当然、NHLから絶頂期にあるスター選手ばかりを召集してチームを作った。ところが楽勝であるはずのシリーズはもつれにもつれ、最初の５試合でソビエトの方が３勝１敗１分けと大きくリードしてしまった。すでにこの時点でカナダのファンはチームをこきおろし、「国の恥、裏切り者」と罵倒する者さえ出てきていた。最後の３試合を勝たないとカナダのナショナル・チームは大恥をかいて帰国しなければならない。そして彼らは見事にそれを成し遂げるのだが、『あの』有名なゴールというのは３対３の同点で迎えた最終試合の終了間際に、ポール・ヘンダーソンという選手が決めた劇的なショットのことである。このおかげでカナダはソビエトに勝ち、ホッケー王国としての栄光を勝ち取った。しかしこの勝利は当事者たちの想像をはるかに超える歴史的な重要性をおびることになる。

この対戦は、ホッケーでの世界一を決めるものとして始まったのだが、いつしかカナダ対ソビエト、「自由社会」対「共産党主義」といった意味合いを持つようなった点が興味深い。選手たちのインタビューを振り返っても、自分たちがあたかも悪の使者を打ち負かしたかのように興奮して語る者が多いのに驚く。大会の得点王、フィル・エスポジートはこう回想する：

「俺達の社会対あいつらの社会、という感じで、俺達にしてみればあれは戦争だった。［中略］…俺はもちろん出ないわけにはいかなかったさ。でもあのシリーズのことは絶対に誤解しちゃいけないぜ。あれは戦争だったし、地獄だった。いや全く、あれは異常だったよ」（Morrison, 1992:17, 筆者訳）

そしてこのシリーズの開催中、一旦は負けかけたチーム・カナダ[14]が奇跡的に連勝し、多くのカナダ

13）Scott Morrison *The Days Canada Stood Still: Canada vs. USSR 1972* (1992: 11)

人が一斉にその試合の中継をまんじりともせずに見守った経験は後々、大きな文化的シンボルとして残ることになる。決勝のゴールをたたき込んだヘンダーソンなどは、今日に至るまで、何千回とその時の話をするはめになり、カナダのスポーツ史上、最も有名な人物となったのである。彼は自分なりにその理由を解釈する：

> 「あのシリーズの間は、フランス語系の人間であるとか西カナダの人間であるとか、そんなものは何もなかった。俺達は皆カナダ人だったんだ。あのシリーズがカナダ人全員を結束させた。試合してるのはチーム・カナダじゃなくて、カナダだったのさ。［中略］…あのシリーズみたいに国を結束させることが出来るものなんて、戦争くらいしかないんじゃないかな」(同上：19、筆者訳)

FLQ の独立運動の波紋もまだ記憶に新しいカナダ人にとって、フランス系カナダ人の選手、カナダ西部出身の選手、オンタリオ州出身の選手達などが力を合わせて、共通の敵と戦い、国の名誉を守ったことはより一層、感動的であっただろう。そしてヘンダーソンのゴールは長い間、カナダ人の「共同記憶」の大切な一部として愛しまれることになるのである。

蝕まれるホッケー王国

対ソビエト・シリーズ以降、カナダでは世界のどの国がレベルを上げてこようとも、ホッケーを生み出した自分たちが本気を(つまり最高のプロの選手選抜を)出せば、苦戦しても必ず勝つ、と思ってきた傾向がある。そして実際、1987年のカナダ・カップと称された国際トーナメントで、チーム・カナダは当時の NHL のオール・スター・チームに匹敵するメンバーを揃え、またもや決勝でソビエト相手に劇的な勝利を遂げている。だが、思えばこれが絶頂期で、それからカナダはホッケー王国の座から滑り落ちる一方であった。

翌年の1988年、カナダの誇るホッケー史上最高の選手、ウェイン・グレツキーがアルバータ州の NHL チーム、「エドモントン・オイラーズ」からトレードに出された。よりにもよって、彼の行き先はアメリカのショービジネスの中心地にあるチーム、L.A. キングスだったのである。この時、単なるホッケー選手の交換というよりも、カナダ人の多くが「国宝の叩き売り」と見なしたのは、真面目に議会でそのトレードを阻止しようとした議員がいたことにも表れている。カナダ各地の新聞が一斉にグレツキーの移籍を嘆き、地元の Edmonton Journal などは第二次世界大戦以来の最大の見出しで、トレードの当日を “Black Tuesday” と報じた。これは当時のカナダの政治的・社会的状況を考えればなおさらうなずける反応と言えよう。首相のマルールーニーはアメリカとの自由貿易協定を結ぼうとやっきになっていたし、多くのカナダ人はその結果、自分達の経済や文化がアメリカに吸収されてしまうのではないかと怯えていたからである[15]。

1990年代に入ってからも、カナダは国際トーナメントでことごとく負けてしまう。NHL のスケジュー

---

14)カナダのナショナル・チーム(主にホッケーにおいて)はこの大会以来、国際大会では必ずこの名称を使っている。

15)Steve Jackson (1996) “Grieving for the Great One: Wayne Gretzky and the 1988 Crisis fo Canadian national Identity” 参照

ルの関係上、世界選手権に最高の選手が出られないのは仕方がないにしても、その言い訳さえ、アメリカはもちろん、ヨーロッパの選手がNHLに多数入ってきている今日、通用しなくなって来ていた。そして今までカナダが連勝を続けていたジュニア選手権でさえ、スウェーデンやチェコ共和国などのチームに毎度、負けるようになってしまった。あまりのていたらくぶりに、カナダは巻き返しをはかり、もう一度、世界にその名を轟かせようとした。そしてその最高の舞台が1998年の長野オリンピックのはずだったのである。

長野では、初めてNHLのシーズンを中断して現役の選手たちがオリンピックに参加することを許可された。カナダは、すでにキャリアも黄昏時を迎えたとはいえ、かの伝説の名プレイヤー、グレツキーを筆頭にそうそうたるメンバーを揃えて挑んだのである。そしてその前評判は確かにどの国のものよりも高かったのだが、蓋を開けてみると優勝どころかメダルさえも獲れないという惨敗ぶりであった。監督の采配が原因、という意見も出るには出たが、まぎれもなく、カナダがチェコ共和国、ロシア、フィンランドなどに実力で引き離されようとしていることをまざまざと見せ付けらる結果になった。

追い討ちをかけるかのように、カナダの女子ナショナル・チームも決勝でアメリカに負けてしまった。過去、世界選手権では無敗の彼女達のショックは計り知れないものだった。この時、カナダのホッケー王国伝説は確実に崩壊したと言えよう。

長野オリンピックでの敗退は、カナダ人に相当な後遺症を残した。全国紙Globe and Mailはオリンピックから二ヵ月も経たない内に、異例の大連載で“A game in crisis”というコラムを12回に渡って掲載し、その初回は新聞の第一面を大きく飾った。そしてしばらくはニュースでも一般市民の間でも、ため息が聞こえ来そうなほどの落胆が伺えた。

たかがオリンピックで負けたくらいで、と他国の人間には思われるだろうが、カナダでもホッケー以外のスポーツのためにこの様な事はもちろん起こらない[16]。だが多くのカナダ人は自分たちのナショナル・アイデンティティーの大切な拠り所が、それも何千万人もの目の前で踏みにじられた気になったに違いないのだ。それがどんなに理想化され、現実には必ずしも沿っていないにしろ、ホッケーはカナダ国歌に歌われているような「北国気質」のシンボルを全て包括したようなスポーツだったのだ。カナダの厳しい自然条件が生み出し、地道な努力を要するスポーツ。愛国心を奮わせ、広大な土地に散らばった国民を結束させ、時には理想を守る武器にもなったスポーツ。それだけに、選び抜かれた最高のチーム・カナダが世界相手に通用しなかったのは多大なショックだったのである。ホッケーがもはや「自分達のスポーツ」でないとすれば、カナダ人を一つの国民として結ぶ絆が弱くなるのではないか。そんな不安が出て来ても当然であろう。

16)実際、2000年度のシドニー・オリンピックでも、カナダは期待以下のメダル数に終わったが、そこで問題になったのはアマチュア・スポーツ協会の在り方だけで、カナダ人としてのアイデンティティーにまで話は及ばなかった。

Ⅳ．最後に：アイデンティティーの再構築を目指して

本論文では、カナダ人たちが隣国アメリカの強烈な影響力に対抗すべく「カナダらしさ」を常に模索している点をまず指摘した。その背景を踏まえて、ホッケーというスポーツがカナダ人にとっての重要な文化的シンボルとなった歴史的経過をたどり、直接カナダ人のナショナル・アイデンティティーの形成に関わった事例を紹介して、その役割を浮き彫りにした。

さて、長野オリンピックでの敗退以降、カナダ人のホッケーに対する見解や取り組み方は変化しただろうか。前述の “A game in crisis” という連載コラムでは、カナダにおけるホッケー教育のシステムの価値が問われている。基本技術の習得よりも試合経験を重視し、幼い頃からリーグ内での成績を意識させる従来の方式は、結局のところ逆効果であるとコラムニストのヒューストンは指摘している。カナダ人達はとにかく闘う事を目的とした選手を創り出して来たため、ヨーロッパの選手に比べて技術的に劣り、国際大会では歯が立たなくなってしまったのであると彼は言う。また別の面でヒューストンが非難するのは、ホッケーを教えるコーチ、選手を応援する親たちの姿勢である。子供達にホッケーを純粋にスポーツとして楽しませ、人間形成の面を重視するのが本筋なのだが、大人達のホッケーに対する思い入れがあまりにも強すぎて、そのプレッシャーに嫌気がさした子供達がホッケーから徐々に離れて行っているそうだ。

1998年の夏、トロント市内で「オープン・アイス」という大々的な会議が開かれた。カナダ各地から様々なレベルのコーチ、選手、協会役員、そしてNHLの代表者が集まって、カナダにおけるホッケー教育の向上を目指したものである。会議の終了と共に、膨大な数の意見をまとめた報告書が作成され、また全国各地のホッケー協会支部に配布された。ヒューストンが指摘した通り、技術教育の重要性、コーチ訓練の充実などの改善分野が挙げられたが、それらの勧告を実際取り入れた支部はまだまだ少ないだろう。

何十年もの積み重ねを経て、今まで良しとされていたコーチ術の伝統や、熱心な親の姿勢をすぐには変えることが出来ないのと同じで、過去一世紀に渡って「カナダ＝ホッケーでは世界一」という方程式を土台に築き上げてきたナショナル・アイデンティティーを見直すことはカナダ人にとって相当辛いだろう。だがとうとうその見直しを避けることができなくなった時、人間は実に柔軟にアイデンティティーの再構築法を思いつくものである。概念定義の際にも述べた通り、ナショナル・アイデンティティーとはあくまで「心理的」な位置付けであり、何をその位置付けの根拠にするかは自由に変えることが出来るはずなのだ。

筆者なりの提案を述べれば、カナダ人はホッケーにおいて自分達が「世界一」であるという見解を放棄する必要はない。ただその根拠を「世界で最もホッケーが強い国であるから」とするのではなく、「世界で最もホッケーの参加人口が多く、大多数のカナダ人の日常生活に浸透していて、他のどの国民よりもホッケーを愛しているから」と変えるべきである。この新しい定義は決してカナダが他国に実力で劣っても良い、ということを意味するものではない。多くの子供達がホッケーを愛し続け、大人達がその育成法の改革に成功すれば、またいつか必ずカナダがホッケー界に君臨する日が

来る事が可能だからである。

だがやはり事はそう簡単に変わらない様にも思える。2002年にソルトレイク・シティーで開催される冬季オリンピックに向けて、カナダ・ホッケー協会が任命したチーム・カナダの首脳陣が去る11月８日に発表された。チームの団長は「あの」グレツキー、長野での雪辱を果たすべく、今度はチームの管理側に就いてオリンピック会場に向かうことになった。記者会見の場で、彼は「金メダルしか眼中にない」と明言し、またしてもカナダには世界一の座以外は許されないとの見解を示してしまった。もちろん、大会に参加する以上は優勝する事が目的である。だがホッケーを生んだ国民、カナダ人だから、勝つことが義務付けられているというプレッシャーは無用ではないだろうか。つまりカナダ人としてのナショナル・アイデンティティーを、世界一のホッケー強国であることとあまりにも単純に結びつけて考えている限り、また長野オリンピックの時の失望が繰り返されかねない、と筆者は言いたいのである。

参考文献

Braudel, Fernand (1986) *L'identite de la France-Espace et Histoire!R, Arthaud-Flammarion*
Carrier, Roch (1979) Le Chandail de Hockey, Montreal: Les Livres Toundra
Cuthbert, Chris and Scott Russel (1997) *The Rink: Stories from Hockey' Home Towns*, Penguin Books
Houston, William (1998) “A game in crisis” *The Globe and Mail*, April 4-17
Isajiw, Wsevolod W. (1999) *Understanding Diversity: Ethnicity and Race in the Canadian Context*, Toronto: Thompson Educational Publishing, Inc.
Jackson, Steven J. (1996) “Grieving for the Great One: Wayne Gretzky and the 1988 Crisis of Canadian National Identity” *Encyclopedia of World Sport*, edited by David Levinson and Karen Christensen, ABC-CLIO, www.bcn.net/home/brworks/public html/BkWorldSportExcerpts.html
Lipset, Seymour Martin (1963) *The First New Nation*; New York: Basic Books
Lipset, Seymour Martin (1990) *Continental Divide: The Values and Institutions of The United States and Canada*, New York: Routlege, Chapman and Hall Inc.
MacInnis, Craig (ed. 1998) *Remembering the Rocket: A Celebration*, Toronto: Stoddart Publishing Co.
Morrison, Scott (1992) *The Days Canada Stood Still: Canada vs. USSR 1972*, Toronto: Warwick Publishing Group
Young, Scott (1952) *Scrubs on Skates*, McClelland & Stewart Inc.
Young, Scott (1953) *Boy on Defense*, McClelland & Stewart Inc.
Young, Scott (1963) *Boy at the Leafs Camp*, McClelland & Stewart Inc.
青柳まちこ編・監訳『「エスニック」とは何か―エスニシティ基本論文集』(新泉社、1996年)